

## 1. はじめに

近年の東京語アクセントの傾向として、アクセントの平板化がよく論じられている。平板式アクセントはピッチアクセントである日本語に特徴的なアクセントと言われている。ラテン語や英語は音の強さでアクセントを表すストレスアクセントであり、単語のまとまりの境界が分からない単調な平板式アクセントは日本語に取り入れられた際に平板式アクセントになりにくい。そのため、平板式アクセントは主に和語のアクセントに多いが、近年外来語にもしばしば確認できる。窪菌（2006）によれば、外来語の基本的なアクセントの法則として、起伏式ならば-3 モーラを含む音節にアクセントの核を置く「-3 の法則」に従い、平板式になる条件は語のなじみ度や 4 拍語であること、語末が軽音節であることなどが言われている。

本論では、平板式アクセントを持つ語の傾向を、アクセント変化の変遷を調査することで見つけ出していきたい。アクセントの変遷を調査するに当たっては『新明解国語辞典』を使用する。語のアクセントが記載されている辞書であり、かつ初版から現在最新の第 8 版までを見ることで約 50 年間のアクセントの変遷が確認できるためである。

特に、アクセントが記載されている辞書の中でも『新明解国語辞典』を選んだのは、『新明解国語辞典』には、原則としてすべての語にアクセントが記載されており、その採用方針として、東京語を基礎とする標準的なアクセントの採用を心がけるとともに、若い世代の新しい型を採用し時代の流れに添う形にしたと記載されているからである。先行研究では、NHK のアクセント辞典<sup>1</sup>に記載されている標準的なアクセントに基づいた調査が多く、『新明解国語辞典』を用いることでより実体的なアクセントの調査が行えると考えた。

アクセントを見ていくと、初版から現在出版されている最新版の第 8 版まででかなりアクセントに変化が見られた。その中でも外来語に和製英語を含めたカタカナ語に着目し、そのアクセントの変化とその傾向と調査したい。

アクセントの変遷を見ていくなかで、特に最近の傾向としてよく挙げられる平板化について、どのような語で起こりやすいのか、もしくは平板化しない条件とはなんなのかについて考察する。

## 2. 先行研究

※引用箇所の下線、中略は引用者による。

日本語のアクセントについて、『日本語学大辞典』には、

アクセントは「語」に対して付与される卓立、または卓立の型である。音声

的にどのようなタイプの卓立を与えるかにより、ピッチアクセント（高さアクセント、高低アクセント）とストレスアクセント（強さアクセント、強弱アクセント）に 2 分されることが多い。日本語は前者の、英語は後者の代表とされる。このうちピッチアクセントは、音が持つ 4 つの音響特徴（音色、高さ、強さ、長さ）のうち、もっぱら高さ（ピッチ）の特徴を使う。一方、ストレスアクセントは強さに依存することが多いが、英語のアクセントのように、強さに加えて長さや高さ、音色まで動員する場合もある。(p.14)

と記載されている。つまり、本来外来語には平板アクセントはなく、日本に伝来した際に何らかの基準で起伏式アクセントか平板式アクセントかに振り分けられ、アクセントが付与される。

また、日本語の音の単位について、『日本語アクセント辞典』によると、

おおよそ日本語の文字の一つひとつに対応する音の「長さ」の単位のことを、「拍（モーラ）」と呼んでいる。(中略)

たとえば「みかん」「1 個」という単語は、音節で数えると「み、かん」「いっ、こ」のように 2 つの単位に区切れるが、拍で数えると「み、か、ん」「い、っ、こ」のように 3 つの単位にも区切ることができる。(p.11)

このような「シン」「ポー」「アイ」のような構造をもつ音節は、「重音節」と呼ばれている。これに対し、たとえば「シンボル」の「ボ」や「ル」などのように、その内部に母音が 1 拍分だけ含まれているような音節は、「軽音節」と呼ばれている。(p.131)

窪菌（1999）は、日本語（東京方言）の外来語は語末から数えて三つ目のモーラにアクセントが置かれる、「-3 の法則」といわれる規則について、語末から三つ目のモーラが特殊モーラ（撥音、促音、長母音・二重母音）である場合は、アクセント核がその左側の自立モーラに移動するという法則を見出し、外来語のアクセント規則を「語末から 3 番目のモーラを含む音節にアクセント核<sup>2</sup>を付与する」と定めた。(p.179,pp.202-203)

また、「-3 の法則」から外れる外来語のアクセント型について、カラヤン、カヤラン、カンヤラ、カンラヤ、カランヤ、カヤンラ（「カラヤン」以外は無意味語）という 6 つの語を東京方言話者に発音させると、以下の三つのアクセント型が観察されたことから考察を行っている。

- a. カ<sup>1</sup>ラヤン, カ<sup>1</sup>ヤラン
- b. カンヤラ, カンラヤ
- c. カラ<sup>1</sup>ンヤ, カヤ<sup>1</sup>ンラ

また、撥音を長音に変えてみても、同様のアクセント型が観察される。

- a. カ<sup>ː</sup>ラヤー, カ<sup>ː</sup>ヤラー
- b. カーヤラ, カーラヤ
- c. カラ<sup>ː</sup>ーヤ, カヤ<sup>ː</sup>ーラ

これらの三つのアクセント型のうち、「-3 の法則」で説明できるのは(c)のみである。(b)の平板式アクセントについては、音節を、「ラ」や「ヤ」のように 1 モーラで単独の音節を作り出す軽音節（別名「短音節」）と、「ラン」「ヤー」のように 2 モーラで一つの音節にまとまる重音節（別名「長音節」）の 2 種類に分類してみると、語末が軽音節の連続で終わる 4 モーラ語は平板化しやすいという傾向が観察される。

(a)は後ろから三つ目のモーラが特殊モーラでないにもかかわらず、すぐ左側のモーラにアクセント核が移動している。この「カラヤン」「カヤラン」のような例外的なアクセントは 4 モーラの場合には、LLH（軽音節+軽音節+重音節）という構造に集中しておこる。(pp.206-209)

まとめると、外来語のアクセントは原則として「-3 の法則」によって付与される。しかし、語末が軽音節であること、4 モーラ語であることの両方に当てはまる場合、平板化しやすくなることが分かった。また、LLH 構造においてのみ、「-3 の法則」から外れる場合も見られた。調査を進めるうち、これらの法則に当てはまらない語も少なくない事が分かった。それらの語について重点的に調査を進めたい。

また、李（1992）は外来語のアクセントの平板化について、以下のように研究をまとめている。

4 拍語の平板型は 212 語（4 拍語全体の 23.2%）もあり、これは平板型の総数 308 例の 68.8%も占めている。<sup>3</sup>上の例からもわかるように、平板型アクセントをもつものは 3 拍のところでも述べている通り「古くから日本語に入ったもので、日常生活によく使われているもの」が圧倒的に多いが、語形の面から見ると次のような傾向がある。

- (1) 縮約された形が多い。4 拍語で 86 例がこの形をしているが、この内 54 語が平板型になっている。「アフレコ、パソコン、マイコン、ラジカセ、リモコン」などの例がそうであるが、これらは「完全に日本語化された」という点からみて平板化されたとも考えられる。
- (2) 語末が「ン」で終わる語は比較的平板型になりやすい。4 拍語だけで 48 例も見られる。これに対して語末に「長音」や後から 2 拍目に「促音」を含んでいる語は平板型になりにくい。4 拍語 1058 例中平板型が 212 語もあるにもかかわらず、語末に長音が入っている語 206 語中平

板型（ゆれのある 1 語を除く）は 1 例も見られない。また後ろから 2 拍目に促音が入っている語は 4・5 拍語で 174 例あるがこの内平板型は 1 語も見つからない。

（中略）また、原語に-ing を持つ 5 拍語は平板型か頭高型が多い。50 例中平板型が 21 例、頭高型が 20 例も見られる。

4 拍語の平板化について新たに、縮約された形であること、語末が「ン」で終わる形であることを条件として挙げている。また、語末に「長音」、語末から 2 拍目に「促音」を持つ語は平板化に抵抗するとした。5 拍語においては、-ing を持つ語は平板化傾向を持つと言っている。

また、塩田（2016）は、『NHK 日本語アクセント新辞典』の改訂<sup>4</sup>に伴い行なわれた NHK アナウンサーへのアクセント調査の結果から、アクセントの平板化について以下のように論じた。

4 拍語については、長音をいずれかの位置に含む語に、平板化の傾向が強いものが見られる。これも、長音を含む外来語はもともと平板型にはなりにくかったが、こうしたものの中に平板化に向かう例が出てきているという形で解釈できる。

5 拍語では、末尾に長音を含むものが多い。

また、5 拍語・6 拍語に関して、英語の“～ing”に由来する語（これを「～イング」と記しておく）が、少なくない。このような音節構造の語に平板型が多いのは、例えば「エンディング、ガーデニング、カンニング、コーティング、コーナリング、サンプリング、センタリング、タイミング、ツーリング、ドーピング、…」などのほかの例を考えてみても推測がつく（ただし、「ショッキングな」「スリリングな」「チャレンジングな」のように、形容詞的な意味を帯びたものについては、どうも平板化には向かないようである）。これも、かつては平板型にはなりにくかったものが、近年の傾向として非常に平板型になりやすくなっているものと考えるのが、妥当であろう。

ここまでに挙げた、窪蘭（1999）、李（1992）、塩田（2016）の平板化しやすくなる語の条件をまとめる。

- ・ 4 拍語である。
- ・ 語末が軽音節の連続である。
- ・ 縮約された形である。
- ・ 語末が「ン」で終わる形である。
- ・ 長音をいずれかの位置に含む。（李は語末に「長音」、語末から 2 拍目に「促音」を持つ

つ語は平板化に抵抗するとしている。)

- ・5拍語は末尾に長音を持つ。
- ・5拍語・6拍語の場合は語末が「～ing」で終わる形である。

これらの条件を参考に『新明解国語辞典』のアクセントの平板化について考察し、検証するとともに、新たな条件の発見も試みる。

### 3、『新明解国語辞典』のアクセント採用基準と記載順について

以下、『新明解国語辞典』の「アクセント表示について」という章から、各版のアクセントの採用基準と、複数アクセントの記載順について示してある部分を引用した。

・第一版(1972) …たまご②①、としより④③のように同じ見出し語のもとに二種の記号を並べたものは、標準アクセントと認められるものが二種類あることを示している。たとえば「卵」は②も①も標準アクセントと考えられるが、②の方がより望ましいと考えたアクセントである。どのようなものを望ましいと考えたかということは、語ごとに事情が様々であるが、古い伝統を持つもの、より多くの人によって用いられているもの、などを上位に置いた場合が多い。(中略) この辞書で標準アクセントとして示したものは、現在の東京語のアクセントである。(中略) 東京アクセントのうちから、標準アクセントとしてふさわしいものを、一種類か多くて二種類、選んで各語のもとに注記することにしたものである。(p.1229)

・第二版(1974) …第一版と同文(p.1231)

・第三版(1981) …第一版と同文(p.1279)

・第四版(1989) …この辞書では、現代の東京生まれ、東京育ちの比較的若い層のアクセントを採った。二十年もたたないうちに日本の社会の中核になるはずの人々のアクセントだからである。(中略) 「十九人資料」<sup>5</sup>で差の出ている語について、五回(二六%)以上あらわれた型は無条件に採択することを原則とした。四回以下でも、「四人資料」<sup>6</sup>で一回でもあらわれていれば、それも採択すべきものとした。さらに、「十九人資料」で老→若の変化がはっきり読み取れるものは、出現度数にかかわらず優先的に採択した。表示は老、若の順とした。『三版』ではアクセントの型の種類は、「大水」のような場合<sup>7</sup>でも二つまでに抑えてあるが、今回は三つまでとした。(中略) 若い層の型ほど先に示してある。(中略) こうして、この辞書のアクセントは、なんらかの人工を施した「標準アクセント」ではなく、東京のありのままの「通用アクセント」である。(pp.1419-1420)

・第五版（1997）…アクセントを並べる順序は、わかっているならば若→老の順に、ときに、山の手風→下町風の順に並べ、年齢差も地域差もはっきりしない場合は、やむをえず多数→少数の順に並べた。

そのアクセントは現代の東京アクセントの実態を反映させようとしたもので、かくあるべき規範を示したものではない。また、放送のことばとしてふさわしいアクセントの規範意識を表示したものでもない。

今回はそれに相当する調査をするだけの時間が与えられなかったので、主として次の四名の情報によった。浅野百合子（一九二〇生、港区芝公園）竜岡博（一九二二生、品川区東五反田）、沢木幹栄（一九五〇生、江戸川区中央）、熊谷康雄（一九五五生、新宿区山吹町）。右のうち、竜岡氏を除く三氏に故人になった鈴木たか氏を加えた四氏が第四版の追加項目（約二千五百語）についても情報を提供している。

まず四名のうち、二名以上が一致したアクセントであることを採用の最低基準とした。四名とも異なることが稀にあったが、そのときは、さらに、倉持保男（一九三四生、豊島句巢鴨）、宮岡良成（一九五七生、小金井市）の二名に情報を求め、六名のうち少なくとも二名が一致するアクセントを採った。

ひとりが複数アクセントを持っていることもあって、二人以上一致するアクセントが三つになる場合があった。この場合は三つとも採った。（pp.1533-1534）

・第六版（2005）…アクセントを並べる順序は、わかっているならば若→老の順に、ときに、山の手風→下町風の順に並べ、年齢差も地域差もはっきりしない場合は、やむをえず多数→少数の順に並べた。

そのアクセントは現代の東京アクセントの実態を反映させようとしたもので、かくあるべき規範を示したものではない。また、放送のことばとしてふさわしいアクセントの規範意識を表示したものでもない。

今回は、二十歳代の若い世代のアクセントを反映させるために、鍋木麗（一九七五生・目黒区）、藤田理子（一九七七生・江戸川区）のふたりに、別別に全巻を見通して、自分のと違うアクセントを抜き出し、それをさらに若くて男性の井口豪（一九七九生・文京区）のアクセントと比較して、一定の作業ルールに従って処理して、現代の若い世代のアクセントとした。

なお、新しく採用された語については、老年層のアクセントを反映させるために、中田信子（一九二四生・新宿区四谷）、中年層として従来からのアクセント提供者沢木幹栄（一九五〇生・江戸川区）、若年層として前述の鍋木麗のアクセントを取りあげた。

・第七版（2012）…本辞典は、これまでの版の流れを承けて、東京語を基礎とする標準的なアクセントを採用するように努めた。しかしながら一口に東京語と言っても、その実態

は単一ではない。当然のことながら、年齢差（世代差）、地域差、個人差がある。（中略）そのアクセントの変化と変異も大きいであろうことは予想できる。

実際、近年、アクセント体系は変わらないものの、その内部の個々の単語アクセントの変動は大きなものがある。動詞・形容詞は後で取りあげるとしてここでは名詞を見ると、特に若い世代における三拍以上、とりわけ四拍語の⑩型の増加が顕著である。外来語ではそれがことさら目につき、しばしば話題になる。本辞典の第四版から第六版にかけても若い世代のアクセントが採用されているが、その後の若い世代が多用する単語については、そのアクセントも今後の動向を見る上で不可欠と考えて採用するようにした。

複数あるアクセントの配列順は、数字の大きいものが先に来ている場合は何らかの優先的な意味をもたせてあるが（その理由はさまざま）、それ以外の配列については、今回は必ずしもこだわらなかった。

アクセントの追加・修正は、組織的な調査に基づくものではなく、一部は東京人に確認したが、他は担当者の体験と関連論文および他のアクセント辞典の記載を参考にした。  
(pp.1655-1657)

第八版（2020）…本辞典は、これまでの版の流れを承けて、東京語を基礎とする標準的なアクセントを採用するように努めた。しかしながら一口に東京語と言っても、その実態は単一ではない。当然のことながら、年齢差（世代差）、地域差、個人差がある。（中略）そのアクセントの変化と変異も大きいであろうことは予想できる。

複数あるアクセントの配列順は、原則として優先順であるが、拮抗している場合も含む。若い世代では逆転している場合もありうる。

第七版から八年あまりが経過したことを踏まえ、基本方針は維持しながらも、特に二一<sup>28</sup>に関して次の変更を行なった。全体を見直して八十代以上しか使っていないと判断した型は除き、若い世代の新しい型を採用して時代の流れに添う形にした。

アクセントの追加・修正に際しては、一部は東京人に確認したが、他は担当者の観察および関連論文ならびに他のアクセント辞典とアクセントを記載した辞典を参考にして判断した。 (pp.1713-1715)

第一版から第三版では、東京語の中でも、標準アクセントにふさわしいものを採用し、より古い伝統のあるアクセントを優先アクセントとしている。

第四版から採用方針が大きく変化し、東京生れ東京育ちの若い層のアクセントを採ったとしている。アクセントの改定にあたっては実際にアンケート調査を行い、標準アクセントではなくより実体的なアクセントの採用に努めている。また、記載順も若い層のアクセントを優先アクセントとしている。アクセントの調査方法は異なるものの、この採用方針は第六版まで続いた。

第七版では、東京語を基礎とする標準的なアクセントを採用するという方針が変わった。

アクセントの改定にあたっては、アンケート調査ではなく、主に文献等のアクセントを参考に行っている。また、アクセントの配列順もとくにこだわらなかったとしている。

第八版ではアクセント採用方針は第七版と変わらず標準アクセントを採用するというものだが、加えて若い世代の新しいアクセントの採用を心がけたとしている。記載順は原則として優先順である。

## 4, 調査

### 4-1 調査方法

カタカナ語のアクセントを追跡するために、『新明解国語辞典』の第1版(1972)から第8版(2020)までの8冊を対象とした。記載されているカタカナ語のうち、ア行の見出し語すべてである「アーカイブ」から「オンレコ」までの1234語のアクセントを確認し、その変遷からアクセント変化の傾向を調査した。なお、アクセント表記は下記の『新明解国語辞典』の表記にしたがい、アクセント核の位置を数字で示した。

日本語のアクセント（東京通用アクセント）とは、単語のどこで下げるかに関する決まりである。その下げる位置を本辞典では前から数えた数字で示した。

三拍語を例にとると、これが意味しているのは次のことである。ツバキ①は最初のツの後で下げる、クサキ②は二番目のサの後で下げる、ツボミ③は最後のミの後にことば（ガ、ヲ、カラ、ヒライタなど）が続くときに下げて発音する決まりになっている。それに対して、スマレ④は、その中でも、次にことばが続いても、下げずに発音することが決まっていることを表す。（第8版 p.1710）

なお、これに加え、辞書に記載の無い語には×で、見出し語として記載はあるがアクセントの記載がない語には－で表した。

アクセントの傾向を調査するにあたって、それぞれの語末音節構造を調査した。語末音節構造とは、語末から数えて二つ目までの音節構造であり、重音節をH (heavy syllable)、軽音節をL(light syllable)で表した。語末から音節を観察するのは、日本語のアクセントが語末から判断されるためである。東京方言ではアクセントの位置が語末から計算されるため、語末の音節構造を見て起伏/平板という基本的なアクセント型の選択を行なっている。つまり、語末に軽音節よりアクセントを担いやすい重音節がくる場合、その語にアクセントが置かれると考えられる。

### 4-2 調査結果

まず、1234 語の内、8 版までの間でアクセントに変化が見られたものは全部で 215 語だった。そのうち、アクセントにゆれが生じたケースが多く見られた。アクセントに変化があったものを取り上げると、初版では変化があった語全体の 83%はアクセントが一つに定まっているが、アクセント表記に大きく変化が見られた第 4 版では 39%、第 8 版では 37%になっている。

また、平板化<sup>9</sup>が起こったものは 69 語であり、特に第 4 版においてその傾向が見られた。

平板化が起こった 69 語をみると、3 拍語が 13 語、4 拍語が 39 語、5 拍語が 11 語、6 拍語が 6 語であり、7 拍以上の語には平板化が見られなかった。5 拍以上の語に平板化の傾向が見られづらいのは複合語の割合が高くなるため<sup>10</sup>である。

さらに辞書に記載されている語全体の内、平板化した語の語末音節構造の割合をみていくと、最も平板化率が高いのは 3 拍語の HL 構造で 26%、次いで 4 拍語の LL 構造が 23%であった。4 拍語の LL が平板化しやすい傾向は上記の窪菌の論と一致している。しかし 4 拍語以外では LL 構造が最も平板化しやすいわけではなく、ばらつきが見られた。また、4 拍語においても、平板化しにくいとされる HH 構造が二番目に平板化率が高く、先行研究とは異なる結果が現れた。(表 1)

表 1 全体の語のうち平板化した語の語末音節構造の割合

拍数/語末音節構造	HH	HL	LH	LL	全体
3 拍	0/0 (0%)	9/34 (26%)	2/18 (11%)	2/46 (4%)	13/98 (13%)
4 拍	6/51 (12%)	3/59 (5%)	5/49 (10%)	25/111 (23%)	39/270 (14%)
5 拍	2/22 (9%)	4/108 (4%)	2/49 (4%)	3/77 (4%)	11/256 (4%)
6 拍	2/52 (4%)	2/115 (2%)	2/45 (4%)	0/55 (0%)	6/267 (2%)

また、頭文字語において顕著な傾向が見られた。全 90 語のうちほとんどが語末から -1 のモーラ (-1 のモーラが重音節の場合は一つ前のモーラ) にアクセントの核があった。例外が 13 語あり、その内イーエル (EL)、エーエム (AM)、エスエフ (SF)、エスエム (SM)、エスエル (SL)、エフエフ (FF)、エフエム (FM)、エルエル (LL)、オーエル (OL)、オーエス (OS) の 10 語に平板式アクセントが見られた。これら全てが語末音節に LL 構造を持つ語だった。

## 5, 考察

### 5-1 4拍語で語末がLL構造の語の平板化傾向

4拍語の平板化傾向について、元々平板式アクセントの語と、途中から平板化が起こった語(平板式アクセントが途中で起伏式アクセントより優先されるようになった語も含む)に差異はあるのかについて調査した。

平板式アクセントを持つ語を5つのパターンに分類した。

- 1, 平板式アクセントで安定しているもの (表2)
- 2, 平板式とそれ以外のアクセントでゆれがあったが、平板式アクセントに安定した語 (表3)
- 3, 元々は平板式アクセントを持っていないが、途中から平板式アクセントが現れた語<sup>11</sup> (表4)
- 4, 元々は平板式アクセントで安定していたが途中からそれ以外のアクセントが現れた語 (表5)
- 5, 上記のいずれにも分類できない語 (表6)

以上のように分類したものを、先行研究を参考にいくつかの観点から順に分析を行ない、それぞれのパターンの傾向を探っていく。

表2 平板式アクセントで安定しているもの

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版	音節構造	コーパス
アカハラ	×	×	×	×	×	×	⊙	⊙	LLLL	15
アセロラ	×	×	×	×	×	×	⊙	⊙	LLLL	37
アドリブ	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	LLLL	111
アナログ	×	×	×	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	LLLL	762
アパレル	×	×	×	×	×	⊙	⊙	⊙	LLLL	228
アフレコ	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	LLLL	44
アボカド	×	×	×	×	×	×	⊙	⊙	LLLL	147
アメリカ	×	×	×	—	—	—	—	⊙	LLLL	28,243
アラビア	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	LLLL	808
アルカリ	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	LLLL	511
アルパカ	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	LLLL	13
アルビノ	×	×	×	×	×	×	×	⊙	LLLL	30
アルミナ	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	LLLL	40

アングラ	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	58
アンゴラ	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	88
アンテナ	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	1,072
アンペラ	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	6
イグアナ	×	×	×	×	×	○	○	○	LLLL	30
イラスト	×	×	×	×	○	○	○	○	LLLL	1,484
インテリ	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	274
インテル	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	411
インフラ	×	×	×	×	×	○	○	○	HLL	677
インフレ	×	×	○	○	○	○	○	○	HLL	1,167
ウェブロ グ	×	×	×	×	×	×	○	○	HLL L	0
ウクレレ	○	○	○	○	○	○	○	○	LLLL	65
エキスポ	×	×	×	×	×	○	○	○	LLLL	71
エクレア	○	○	○	○	○	○	○	○	LLLL	39
エスエム (SM)	×	×	×	×	×	×	○	○	LLLL	234
エナメル	○	○	○	○	○	○	○	○	LLLL	224
エフエフ (FF)	×	×	×	×	×	○	○	○	LLLL	598
エンスト	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	70
エンタメ	×	×	×	×	×	×	×	○	HLL	25
オーエス	×	×	×	○	○	○	○	○	HLL	1,950
オートメ	×	×	○	○	○	○	○	○	HLL	2
オーラス	×	×	×	×	×	×	○	○	HLL	33
オフレコ	○	○	○	○	○	○	○	○	LLLL	51
オムレッツ	○	○	○	○	○	○	○	○	LLLL	192
オレガノ	×	×	×	×	×	×	○	○	LLLL	56
オンレコ	○	○	○	○	○	○	○	○	HLL	8

全部で 39 語。内、19 語（アドリブ、アフレコ、アラビア、アルカリ、アルパカ、アルミナ、アングラ、アンゴラ、アンテナ、アンペラ、インテリ、インテル、ウクレレ、エクレア、エナメル、エンスト、オフレコ、オムレッツ、オンレコ）は第一版から第八版まで平板式アクセントで安定している。

表3 平板式とそれ以外のアクセントでゆれがあったが、平板式アクセントに安定した語

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版	音節構造	コーパス
アカシア	①②	①②	①②	①	①	①	①	①	LLLL	98
アトリエ	①③	①③	①③	①	①	①	①	①	LLLL	492
アネモネ	②①	②①	②①	①	①	①	①	①	LLLL	65
アルバム	①①	①①	①①	①	①	①	①	①	LLLL	2,379
エーテル	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①①	①	HLL	119
エスプリ	④①	④①	④①	①	①	①	①	①	LLLL	54
エフエム (FM)	③①	③①	③①	①	①	①	①	①	LLLL	682
オーロラ	①③	①③	①③	①	①	①	①	①	HLL	143

エーテル以外は第三版までゆれがあったが第四版から平板式アクセントに安定した。

表4 元々は平板式アクセントを持っていないが、途中から平板式アクセントが現れた語

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版	音節構造	コーパス
アドレス (メール)	×	×	×	×	×	①	①	①①	LLLL	3,691
アレグロ	②	②	②	①②	①②	①②	①②	①②	LLLL	33
イースト	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①	HLL	401
イーゼル	①	①	①	①	①	①	①	①①	HLL	39
イスラム	×	×	×	×	①	①	①	①①	LLLL	2,504
ウエスト	②	②	②	②	②	②	②①	①	LLLL	1,012
エアバス	×	×	③	①③	①③	①③	①③	①	LLLL	0
エーエム (AM)	③	③	③	①③	①③	①③	①③	①③	HLL	945
エスエフ (SF)	③	③	③	①③	①③	①③	①	①	LLLL	574
エスエル (SL)	×	×	×	×	③	③	①	①	LLLL	325
エルエル (LL)	③	③	③	①	①	①	①	①	LLLL	37
オーエル	③	③	③	①③	①③	①③	①③	①③	HLL	652
オーボエ	①	①	①	①	①	①	①①	①①	HLL	59
オカリナ	②	②	②	①	①	①	①	①	LLLL	42
オカルト	×	×	②	①②	①②	①②	①②	①②	LLLL	143

エスエル、エルエル、オカリナのように起伏式から平板式に一気に変化したもの、アドレス、アレグロ、イーゼル、イスラム、エーエム、オーエル、オーボエ、オカルトのように平板化は起こったがまだ起伏式と平板式でゆれがあるもの、イースト、ウエスト、エアバス、エスエフのように平板化が起こってからしばらくゆれがあったが最終的に平板式に安定したものの3つのパターンが見られる。

表 5 元々は平板式アクセントで安定していたが途中からそれ以外のアクセントが現れた語

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版	音節構造	コーパス
アントレ	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①①	HLL	25
インジゴ	①	①	①	①	①	①	①①	①①	HLL	64
オンドル	①	①	①	①	①	①	①	①①	HLL	31

すべて音節構造が HLL である。また、コーパスにおける出現数が少ない。さらに、すべて頭高アクセントが新しく現れている。

表 6 上記のいずれにも分類できない語

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版	音節構造	コーパス
アカペラ	×	×	×	×	×	②①	②①	①②	LLLL	67
アクリル	②	②	②	①①	①①	①①	①①	①①	LLLL	322
アドレス (住所)	①②	①②	①②	①	①	①	①	①①	LLLL	3,691
アプリケ	③	③	③	②③ ①	②③ ①	②③ ①	②③ ①	③②	LLLL	10
アルプス	②①	②①	②①	①①	①①	①①	①①	①	LLLL	357
イーエル (EL)	×	×	×	×	×	①③ ①	①③	①③	HLL	0
エニシダ	②①	②①	②①	①②	①②	①②	①②	①②	LLLL	17

アクリル、アドレス、アプリケは表 4 (元々は平板式アクセントを持っていないが、途中から平板式アクセントが現れた語) に分類できなくはないが、平板化と別の新たな起伏式アクセントの出現とが同時に含まれるため、今回は分析をわかりやすくするためにこちらに分類した。

まず、音節構造の面から見ていく。すべて語末音節構造は LL だが、さらに全体の音節構造 (LLLL、HLLL、HLL) の分布を確認する。

その結果、1, 2, 3, 5 のパターンにおいて大きく偏りは見られず、LLLL と HLL が散見された。

1 は LLLL がアセロラ、アナログなど 24 語 (62%)、HLL がアンテナ、インテリなど 14 語 (36%)、HLLL がウェブログの 1 語 (3%) だった。

2 は LLLL がアカシア、アトリエなど 6 語 (75%)、HLL がエーテル、オーロラなど 2 語 (25%) だった。

3 は LLLL がアドレス、イスラムなど 10 語 (67%)、HLL がイーゼル、エーエムなど 5 語 (33%) だった。

5 は LLLL がアカペラ、アクリルなど 6 語 (86%)、HLL がイーエルの 1 語 (14%) だった。総じて LLLL の割合が高いが、そもそもの母数の違いであり、傾向としては各パターンに違いは見られなかった。

唯一 4 の、元々は平板式アクセントで安定していたが途中からそれ以外のアクセントが現れた語は 3 語すべてが HLL であり、偏りが見られた。HLL 構造は 1 音節目に重音節を持つため、1 拍目にアクセントが来やすく、語末が LL 構造の中でも平板化しにくい構造であるため、元々は平板式アクセントであっても逆行して頭高アクセントを中心にそれ以外のアクセントが現れる事があると考えられる。しかし、例が 3 例しかなく、また平板式アクセントで安定した 1 や 2 の例にも HLL 構造が見られるため、このような場合もあると言うに留まる。

次に同じく 1~5 のパターンについて、なじみ度の観点から見ていく。なじみ度の調査をするに当たっては、コーパス検索アプリケーション「中納言」を使用した。「中納言」の現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ において語句を検索し、ヒット件数をなじみ度とした。<sup>1213</sup>

その結果、これも大きな差異は見られなかった。最もなじみ度が高いと推測していた 1 の、平板式アクセントで安定している語の中でも、ヒット件数が 100 件を超えた語は半数の 18 件だけであり、ウェブログは 0 件、オートメは 2 件、アンペラは 6 件と極端に少ない語もあった。また、各パターンの中央値をとって確認も行なった。

1 は 71、2 は 131、3 は 325、4 は 31、5 は 67 と、3 の、元々は平板式アクセントを持っていないが、途中から平板式アクセントが現れた語が最も高かった。なじみ度が比較的高い 2 と 3 において第四版から平板化が現れた事から、第一版刊行の時点では平板式アクセントの付与となじみ度にはあまり関係が無く、第四版刊行辺りからなじみ度が平板化に関係しはじめたことが読み取れる。しかし、後述する平板化しない語に関してもなじみ度を調査したところ、中央値は 172 と全体で二番目に高く、今回の調査方法においてはなじみ度と平板化に強い関連性があるとは言えない。

続いて、語形の面から分析を行う。先行研究では、“縮約された形である”、“語末が「ン」である”、“長音をいずれかの位置に含む”という条件が挙げられていた。まずはそれらの条件について確認し、その後新たな条件の発見を試みる。

まず、1 から 5 のパターンのうち、縮約された形の語は 1 にのみ見られた。

1 の 39 語のうち、「アカハラ」、「アフレコ」、「インフラ」など 14 語が縮約された形であった。このことから、外来語において、縮約された形の語は日本語に取り込まれる時に平板式アクセントを与えられると推測できる。

続いていずれかの位置に長音を含む語は、1 に「オーエス」、「オートメ」、「オーラス」の 3 語、2 に「エーテル」、「オーロラ」の 2 語、3 に「イースト」、「イーゼル」、「エーエム」、「オーエル」、「オーボエ」の 5 語見られた。平板化から逆行するタイプの 4 には 1 語も見られなかった。この調査は語末が LL 構造の語に限定しているため、長音が 2 拍目に限定されたが、先行研究ではいずれかの位置に含むとしているため、平板化した 4 拍語の LL 構造以外も確認したところ、「アウトター」、「アガペー」、「インナー」、「オーダー」の 4 語のみであり、すべて途中から平板式アクセントが現れる 3 に分類されるアクセントであった。

ここで、すべての 4 拍語のうち、長音を含む語の長音の位置を確認した。その結果、長音の位置が 2 拍目なのが 30 語、3 拍目が 20 語、4 拍目が 39 語、2 拍目と 4 拍目両方なのが 14 語であった。以上の結果から、長音を含む語は平板化しにくい、長音を 2 拍目に含む場合は平板化しはじめたと考えられる。

最後に語末が「ン」であるという条件についてだが、そもそも語末が軽音節で終わる語の分析のため、語末ではなく、2 拍目が「ン」である語について分析を行う。2 拍目に「ン」を持つ語は、1 に「アングラ」、「アンゴラ」、「アンテナ」など 11 語、4 は「アントレ」、「インジゴ」、「オンドル」の 3 語すべてのみであった。また、4 拍語 LL 構造だが起伏式の語も確認すると、「アンクル」、「アングル」、「エンゼル」など 7 語あった。1 の語について、2 拍目が「ン」の 11 語のうち、「アングラ」、「インテリ」、「インフラ」、「インフレ」、「エンスト」、「エンタメ」、「オンレコ」の 7 語が縮約された形の語であった。2 拍目が「ン」の語は、2 と 3 には無く、逆行型の 4 と起伏式に多く確認できることから、原則平板化しにくい、1 に多く見られたように縮約された形であれば、平板型になる傾向があると言える。

## 5-2 4 拍語で語末が LL 構造の語の平板化しない条件

平板化が起りやすい LL 構造の 4 拍語において平板化しない語に傾向があるのかについて調査する。4 拍語の LL 構造を持つ語の内、平板式アクセントを持たない語は「アイデア」や「ウイルス」など 32 語あった。その内、「アイドル」や「アイリス」、「アクセル」など 25 語が 1 拍目にアクセント核を持つ、頭高アクセントだった。4 拍の LL 構造語だけでなく、1234 語全体を見ても、頭高アクセントを持つ語はアクセントのゆれが少なく、頭高アクセントは安定的であることが確認できた。実際、4 拍語でアクセントが一貫している語を調べると、

頭高型 (①) が 63 語 (アイゼン、アイテム、アイドル、アイリス、アクション、アクセル、アクティブ、アスキー、アスター、アッサイ、アップル、アトニー、アトラス、アニマル、アパシー、アブサン、アメダス、アルゴン、アルペン、アンカー、アンクル、アングル、アンダー、アンバー、アンブル、イージー、イーブン、イデオム、イニング、イロニー、インター、インディゴ、インレー、ウーマン、エーカー、エートス、エクラン、アスキス、エステル、エックス、エッセー、エディター、エレジー、エンジェル、エンジン、エンゼル、エンボス、オークス、オークル、オーシャン、オーナー、オーバー、オパール、オープン、オープン、オーライ、オスカー、オクケー、オナニー、オニオン、オブション、オリオン、オンリー)。

-3 型 (②) が 44 語 (アサイン、アジェンダ、アシスト、アセトン、アダージョ、アダジオ、アタック、アダルト、アチーブ、アテンポ、アパート、アバウト、アパッチ、アピール、アベック、アヘッド、アミーバ、アムール、アメーバ、アラーム、アレンジ、イエロー、イコール、イレブン、ウィーク、ウィザード、ウィッグ、ウイット、ウイドー、ウインク、ウインチ、ウインナ、ウエーブ、ウエット、ウオッチ、エコール、エディション、エリート、オパール、オフENSE、オマージュ、オミット、オリーブ、オレンジ)。

平板型 (③) が 43 語 (アイロン、アカハラ、アセロラ、アドリブ、アナログ、アパレル、アフレコ、アボカド、アラビア、アルカリ、アルパカ、アルミナ、アングラ、アンゴラ、アンテナ、アンペラ、イグアナ、イベント、イラスト、インテリ、インテル、インフラ、インフレ、ウインド、ウェブログ、ウクレレ、エキスポ、エクレア、エスエム、エディター、エナメル、エフエフ、エンスト、エンタメ、オーエス、オートメ、オーラス、オフコン、オフレコ、オムレッツ、オルガン、オレガノ、オンレコ)。

-2 型 (④) が 31 語 (アイキュー、アイシー、アイティー、アイピー、アウエー、アンフェア、アンペア、イーイー、イーブイ、イーユー、インハイ、エーアイ、エーエー、エーディー、エーブイ、エーワン、エスイー、エスピー、エヌジー、エムシー、エムピー、エルケー、エルディー、エンジョイ、オーエー、オービー、オージー、オフショア、オンエア) だった。

以上のことより、頭高アクセントは安定的で平板化に抵抗し、中高アクセントは不安定であるといえる。

また、平板化しない条件について、上記の平板化傾向で述べたが、長音を含むもの、2 拍目が「ン」であるものが挙げられる。

表 7 4 拍の語末 LL 構造で平板化しない語

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版	音節構造	コーパス
アイデア	③	③	③	③	③	③	③	③①	HLL	1,783
アイテム	×	×	×	×	×	①	①	①	HLL	1,962

アイドル	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	918
アイリス	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	176
アキレス	②	②	②	①②	①②	①②	①②	①②	LLLL	186
アクセス	×	×	×	×	③①	③①	③①	①③	LLLL	3,421
アクセル	①	①	①	①	①	①	①	①	LLLL	527
アシスト	×	×	×	×	×	×	②	②	LLLL	210
アダジオ	②	②	②	②	②	②	②	②	LLLL	5
アダルト	×	×	②	②	②	②	②	②	LLLL	481
アップル	①	①	①	①	—	—	—	—	HLL	725
アトラス	①	①	①	①	①	①	①	①	LLLL	115
アニマル	×	×	×	×	×	×	①	①	LLLL	193
アメダス	×	×	×	①	①	①	①	①	LLLL	35
アンクル	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	67
アングル	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	315
アンプル	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	85
アンペア	③	③	③	③	③	③	③	③	HLL	168
イディオム	①	①	①	①	①	①	①	①	LHL L	22
ウイルス	①	①	①	②①	②①	②①	②①	②①	LLLL	3,546
エートス	①	①	×	①	①	①	①	①	HLL	46
エスキス	①	①	×	×	×	×	×	×	LLLL	19
エステル	①	①	①	①	①	①	①	①	LLLL	226
エックス (X)	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	9,484
エトワス	①	①	①	①	×	×	×	×	LLLL	0
エンゼル	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	130
エンボス	×	×	×	①	①	①	①	①	HLL	31
オアシス	②①	②①	②①	①②	①②	①②	①②	①	LLLL	287
オックス	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	85
オークル	①	①	①	①	①	①	①	①	HLL	10
オーバル	①	①	①	①	×	×	×	×	HLL	0
オンエア	③	③	③	③	③	③	③	③	HLL	35

アクセントの揺れが少なく、特にアイドル、イディオム、エンゼルなど頭高アクセントで安定している語が多い。

### 5-3 5拍語の平板化傾向

5拍語で平板化がおこった語は「ウインカー」、「ウエーター」など10語あった。(表8) 語末音節構造の割合は、HH構造が最も多かったものの、9%にとどまった。そのため、5拍語では、語末音節構造による分析ではなく、別の観点から考察を進める。それぞれの単語の末尾に注目すると、2つのパターンに分類できる。まず1つ目は、「エッチング」や「ウィービング」など、「～イング」で終わる型である。この型は4語見られる。2つ目は、「ウインカー」、「ウエーター」など、「aー」で終わる型で、3語見られる。「イニシアル」、「オリジナル」、「アスピリン」はいずれの型にも分類できなかった。以上の2つのパターンについて、それぞれ5拍語全体における平板化割合をだして、平板化しやすいと言えるのか確認した。平板化の割合を出す前に、用例数を増やすため、力行まで調査を広げた。

まず、「～イング」型において(表9)、全24語のうち、17語(71%)が平板式アクセントを持っており、「～イング」型は先行研究が言っているように、『新明解国語辞典』においても平板化しやすいと言えるだろう。これは、そもそも「～イング」型が用例として多いことや、初版から平板式アクセントで表記される「カッティング」や「カンニング」のような「～イング」型のいくつかの語が日本で広く使われるようになり、平板式で発音されるようになった結果、「エッジング」や「キスリング」などのように、末尾が「～イング」で終わるといった形を取る語は同様に平板式で発音されるようになったと考えられる。

続いて「aー」で終わる型について(表10)、ア行のみの時点では50%が平板化しており、これらは英語表記すると「～er」、「～or」などになる語のため、用例も多く、また「～イング」型の「イングで終わる＝平板式アクセントをとる」といったように形式化されやすいからではないかと仮説を立てた。しかし、力行まで調査を広げたところ、平板化率は35語のうち9語(26%)にまで下がり、「aー」型は平板化しやすいとは言い切れない結果になった。先行研究では末尾に長音がつく5拍語は平板化しやすいと言われていたが、ア行調査時点で末尾が長音で終わる34語のうち、「ウインカー」、「ウエーター」、「アダプター」の3語しか平板化していないこと、力行を含めても上記のように平板化数は多くないことから考えると、『新明解国語辞典』においてはこの条件は当てはまらなかった。

表8 平板化した5拍語

	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版	語末音節構造
ウインカー	②	②	②	②	②	②	②	②①	HH
ウエーター	②	②	②	②	②	②	②	②①	HH
エッチング	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①	HL

ウィービング	①	①	①	①	①	①	①	①①	HL
エージング	×	×	×	×	×	×	①①	①①	HL
エッジング	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①	HL
アスピリン	③	③	③	①	①	①	①	①	LH
アダプター	②	②	②	②	②	②	②	②①	LH
イニシアル	②	②	②	①① ②	①① ②	①① ②	①②	①②	LL
オリジナル	②	②	②	②	②	②	②	②①	LL

表9 「～イング」型の5拍語一覧

～イング型	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版
イブニング	①	①	①	①	①	①	①	①
イヤリング	①	①	①	①	①	①	①	①
インニング	①	①	①	①	①	①	①	①
ウィービング	①	①	①	①	①	①	①	①①
ウエディング	①	①	①	①	①	①	①	②
ウォーキング	×	×	×	×	×	①①	①①	①①
エージング	×	×	×	×	×	×	①①	①①
エッジング	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①
エッチング	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①
エンディング	×	×	×	×	×	①	①	①
カービング	×	×	×	×	×	×	①①	①①
カーリング	×	×	×	×	①	①	①	①
カッティング	①	①	①	①	①	①	①	①
カンニング	①	①	①	①	①	①	①③	①
キスリング	③	③	③	①①③	①①③	①①③	①①③	①①
キャストイング	×	×	×	×	①	①	①①	①
キャッシング	×	×	×	×	×	①	①	①
キャンピング	①	①	①	①	①	①	①	①
キルティング	①	①	①	①	①	①	①①	①①
クッキング	①	①	①	①	①	①	①	①
ケーシング	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①①
コーキング	×	×	①	①①	①①	①①	①①	①①

コーチング	×	×	×	×	×	×	①	①
コーティング	①	①	①	①①	①①	①①	①①	①

表 10 「～a-」型の5拍語一覧

～a-型	第一版	第二版	第三版	第四版	第五版	第六版	第七版	第八版
アタッカー	×	×	×	×	②	②	②	②
アダプター	②	②	②	②	②	②	②	②①
イレギュラー	②	②	②	②	②	②	②	②
イースター	①	①	①	①	①	①	①	①
ウインカー	②	②	②	②	②	②	②	②①
ウエーター	②	②	②	②	②	②	②	②①
ウォーター	②	②	②	②	②	②	②	②
オイスター	①	①	①	①	—	—	①	①
カウンター	①①	①①	①①	①	①	①	①	①
カスタマー	×	×	×	×	×	①	①	①
カレンダー	②	②	②	②	②	②	②	②
キャニスター	×	×	×	×	×	×	×	①
キャブレター	③	③	③	③	③	③	③	③
キャラクター	①	①	①	②①	②①	②①	②①	②①①
ギャンブラー	×	×	×	①	①	①	①	①
キュレーター	×	×	×	×	×	×	②	②①
クーデター	③	③	③	③	③	③	③	③
クエーカー	②	②	②	②	②	②	②	②
クエーサー	×	×	×	×	②	②	②	②
グライダー	②	②	②	②	②	②	②①	②①
クライマー	×	×	×	②	②	②	②	②
クラスター	×	×	×	×	×	×	×	②
クラッカー	②	②	②	②	②	②	②	②
クラッシュャー	②	②	②	②	②	②	②	②

クリーナー	②	②	②	②	②	②	②	②
クルーザー	×	×	×	×	②	②	②①	②①
クレーター	②	②	②	②	②	②	②	②①
クレンザー	②	②	②	②	②	②	②	②
クローバー	×	×	×	②	②	②	②	②
クロスバー	③	③	③	④③	④③	④③	④	④
コースター	①	①	①	①	①	①	①	①
コンピューター	×	×	×	×	×	×	②	②
コレクター	×	×	×	②	②	②	②	②
コンテナ	①	①	①	①③	①③	①③	①③	①
コンベヤー	③	③	③	③	③	③	③	③

## 6. まとめ

本稿では、外来語アクセントの平板化について、『新明解国語辞典』を用いて調査を行い、特に4拍語と5拍語における平板化の傾向と条件の発見を目的とした。以下に調査結果と平板化の条件についてまとめる。

### 《調査結果》

- ・調査した1234語のうち、平板化したのは69語。
- ・平板化率が高いのは3拍語のHL構造と4拍語のLL構造。

### 《4拍語について》

- ・4拍語LL構造で、縮約された形の語は平板式アクセントが与えられる。
- ・起伏式アクセントを持つ語でも、なじみ度が高くなると第四版以降で平板化する傾向がみられるが、当てはまらない場合も多い。
- ・いずれかの位置に長音を含むものは平板化に抵抗するが、2拍目が長音の場合は近年平板化しはじめた。
- ・2拍目に「ン」を持つ語は平板化に抵抗する。
- ・平板式アクセントを持つ語でも、HLL構造で2拍目が「ン」である場合平板化に逆行して頭高アクセントが現れる場合がある。
- ・頭高アクセントは安定的で平板化に抵抗する。

### 《5拍語について》

- ・「～イング」で終わるものは平板化しやすい。
- ・先行研究とは異なり、語末に長音がくるものは平板化しやすいとは言えない。

研究の結果、以上のことがわかった。特に、4拍語において、“長音を含むカタカナ語は基本的に平板化しにくい”が、2拍目が長音の場合平板化しやすい”、“2拍目が「ン」の場合

平板化しにくい”という 2 点について、先行研究にはない新たな発見であるだろう。5 拍語においては、新たな条件の発見を試みたが、見つけることは出来なかった。

## 7. 参考資料・文献

- ・金田一京助、金田一春彦、見坊豪紀、柴田武、山田忠雄 編『新明解国語辞典』1972、三省堂
- ・金田一京助、金田一春彦、見坊豪紀、柴田武、山田忠雄 編『新明解国語辞典 第二版』1974、三省堂
- ・金田一京助、金田一春彦、見坊豪紀、柴田武、山田忠雄 編『新明解国語辞典 第三版』1981、三省堂
- ・金田一京助、見坊豪紀、柴田武、山田忠雄 編『新明解国語辞典 第四版』1989、三省堂
- ・金田一京助、山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄 編『新明解国語辞典 第五版』1997、三省堂
- ・山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄 編『新明解国語辞典 第六版』2005、三省堂
- ・山田忠雄、柴田武、酒井憲二、倉持保男、山田明雄、上野善道、井島正博、笹原宏之 編『新明解国語辞典 第七版』2012、三省堂
- ・山田忠雄、倉持保男、上野善道、山田明雄、井島正博、笹原宏之 編『新明解国語辞典 第八版』2020、三省堂
- ・川上泰『日本語アクセント論集』1995、汲古書院
- ・窪蘭晴夫『現代言語学入門 日本語の音声』1999、岩波書店
- ・窪蘭晴夫『アクセントの法則』2006、岩波書店
- ・松森晶子、新田哲夫、木部暢子、中井幸比古『日本語アクセント入門』2012、三省堂
- ・日本語学会 編『日本語学大辞典』2018、東京堂出版
- ・塩田雄大「外来語のアクセントの現況～在来語化する外来語～」『放送研究と調査』2016、NHK 出版
- ・李香蘭「日本語における外来語のアクセントの拍数別特徴」『東北大学文学部日本語学科論集』第 2 号、1992、東北大学日本語学科
- ・[コーパス検索アプリケーション『中納言』\(ninjal.ac.jp\)](http://ninjal.ac.jp) (最終ログイン日 2024 年 1 月 30 日)

---

<sup>1</sup> NHK (編)『日本語発音アクセント辞典』1998、日本放送出版協会  
NHK (編)『日本語発音アクセント新辞典』2016、NHK 出版 など

<sup>2</sup> アクセントが低くなる直前の拍のこと

- 
- 3 NHK（編）『日本語発音アクセント辞典』（1985）による調査
- 4 NHK（編）『日本語発音アクセント辞典』（1998）から、NHK（編）『日本語発音アクセント新辞典』（2016）への改訂。
- 5 山の手・下町、老年・若年、男・女の条件を組み合わせた19人について調査したもの。柴田武監修、馬瀬良雄・佐藤亮一編『東京語アクセント資料』上・下、1985
- 6 山の手出身の老年層、山の手出身の若年層、下町出身の老年層、下町出身の若年層をそれぞれ代表する一名ずつの話者から、『三版』のアクセント表示のあるすべての語（80,845語）について調査したもの。
- 7 大水①③④のようにアクセントが3つ以上ある場合。
- 8 近年の変化とそれに対する採否方針
- 9 本論での平板化とは、途中から平板式アクセントが現れた場合、起伏式との間でゆれがあったが平板式に安定した場合、平板式アクセントの優先度が高くなった場合を言う。
- 10 複合語は原則以下の2つのアクセント規則に則ってアクセントが与えられる。
- ・後部要素が平板型の場合は後部要素の1拍目までが高くなる。
  - ・後部要素が起伏式の場合は後部要素のアクセント核まで高くなる。
- 11 より細かく分けることもできるが、細かくしても分析内容に変化は見られないと思われること、用例数が少なくなってしまうことなどを考慮し、今回はひとつにまとめた。
- 12 「中納言」の検索対象は1976年～2005年の30年間
- 13 「アドレス」はメールアドレスを示すものと、住所を示すものがあるが、今回はヒットしたものの語彙まで確認できなかったため、どちらも同件数とした。